

之右衛門佐小野道風書之、皇后宮使藏人右衛門權佐兼權大進定經勤仕之、左衛門尉能盛以下衛府以上者二人雖中詩臣、俄依無例停止了云々、

〔江談抄〕四五嶺蒼々雲往來 但憐大庾萬株梅天曆十年內裏御屏風詩、菅三品

廣州山中嶺有五、其一在大庾嶺上多梅樹、南枝先花開、此御屏風詩題目者、左大辨大江朝綱奉勅、自坤元錄中撰進三人作詩、即朝綱、文章博士橘直幹、大内記菅原文時也、參議大江維時蒙詔評定、采女正巨勢公忠畫、左衛門佐小野道風書、並當時秀才也、總八帖、廿首、三人作六十首、選定江十首、橘二首、菅八首、作者瀝思、不如此詩、或人云、紀在昌不入作、内心竊爲歎云々、

〔古今著聞集〕十一能通、繪師良親に、屏風二百帖に繪をか、せたりけり、其中坤元錄屏風をば、良親相傳の本にてなん書侍ける、大女御まいり給ける時、二條殿にまいらせさせてんけり、色紙形は四條大納言ぞか、れける、更に又爲成をしてうつされけり、正本は一の人の御相傳の物に侍にこそ、

〔紀貫之集〕延喜六年、月次の御屏風八帖料歌四十五首、依内勅奉之、行て見ぬ人も、玄のべと春の野のかたみにつめる、若なりけり

〔古今著聞集〕五和歌、天曆の御時、月次御屏風の歌に、搦衣の所に兼盛詠て云、

秋ふかき雲井の雁のこゑすなり、衣うつべきときや來ぬらん

紀時文、件の色紙形をかく時、筆をおさへていはく、衣うつを見て、うつべき時やきぬらんと詠するいかゞ、兼盛にやがてたづねらるゝ所に、申ていはく、貫之が延喜御時、同屏風に、駒迎の所に、逢坂の關の玄水にかけ見えて、いまやひくらん望月の駒と詠す、此難ありやいかゞ、時文口をとづ、玄かも時文は貫之が子にてかくなんそしりける、よく浅かりけり、

〔江家次第〕正月四方拜事